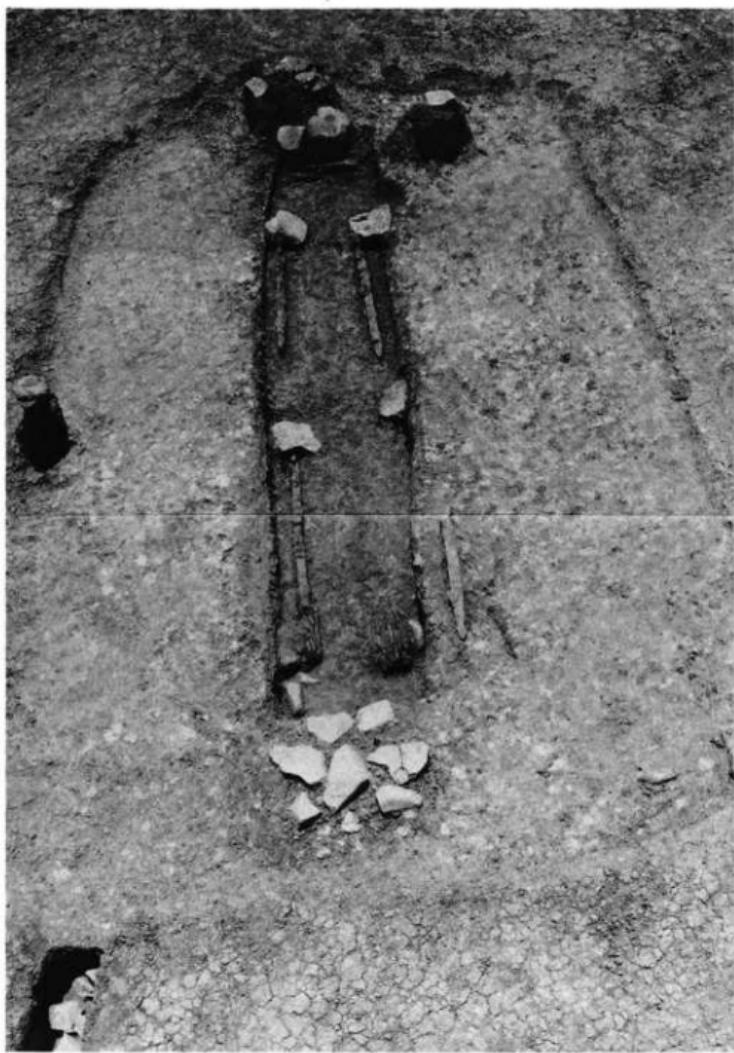




山崎古墳

1984.3

松江市教育委員会



墓 墳 全 形 (南をみる)

凡　　例

1. 本書は、松江市教育委員会が豊和産業有限会社から委託を受け、昭和58年4月25日から昭和58年5月31日までの内、計29日間を要して行なった山崎古墳の発掘調査の概要報告である。

2. 発掘調査事業の組織は、下記のとおりである。

委託者 豊和産業有限会社

代表取締役 木村勝吉

受託者 松江市

代表者 松江市長 中村芳二郎

主体者 松江市教育委員会教育長 内田栄

事務局 松江市教育委員会社会教育課

総括 社会教育課長 石飛進

庶務会計 文化係長 中西宏次 (昭和58年10月から社会教育係長)

文化係主事 加藤瞳 (昭和58年9月まで)

社会教育係主事 菅井純子 (昭和58年10月から)

担当者 文化係主事 岡崎雄二郎 (昭和58年10月から文化係長)

調査員 泰誠司

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 位置と歴史的環境	1
III 調査の概要	3
(1) 墳丘の構造	3
(2) 埋葬施設	3
(3) 排水施設	8
(4) 出土遺物	10
IV 小 結	14

I 調査に至る経緯

本古墳は、松江市教育委員会が昭和51年度に実施した分布調査によって明らかになったものであるが、その時の観察では、上半部がきれいに伐採してあり、関係者によって祀られているようであった。

その後、昭和57年10月に至り、豊和産業有限会社から、本古墳を含む一帯の山林約9,900坪について住宅団地（仮称・学園台団地）を造成する旨の協議があった。

そこで、本古墳の取り扱いについて種々協議した結果、事前に発掘調査を実施して価値を確かめることになった。調査は、昭和58年4月25日から同年5月31日まで実施した。その後、昭和58年8月1日から同年9月3日まで26日間を要して出土遺物や図画の整理作業をして完了した。

II 位置と歴史的環境

本古墳は、松江市西川津町字山崎3280番地にあり、北方に派生する丘陵の最高所（標高36m前後）に立地する。

古墳の東側は、現在、島根県立松江東高校の用地となっているが、用地として整備されたのは昭和56年のことであり、それまではうっそうとした山林であった。

この山林の尾根沿いには、かつて「馬込山古墳群と古墓群」があった。昭和44年に、県教委によって調査されたが未報告である。^① いずれも小規模の方墳や円墳状である。また、この古墳群のやや北方尾根上にも1基、方墳が所在していた。

一方、本古墳の約70m東南方の同じ丘陵尾根上には、長さ約20mの前方後方墳と推定される古墳1基と2基の小規模な方墳群がある。^②

さらに、東南方向200mの山林中には、柴I、II遺跡があった。

古墳時代前期（出土した古式土師器から5世紀前半頃という）の堅穴住居跡2棟と溝状遺構^③4が検出されている。

古墳時代の住居跡は、南方柴池の南側丘陵の斜面で10棟以上検出されている。これは、山崎古墳調査の直後、松江市立第二中学校移転用地内の調査で見つかったもので、比高30mほどの丘陵の上部平坦地や斜面の尾根直下から水田の際までの急斜面にあり、古式土師器もあるが出土須恵器でみると山本編年のI期～III期にかけて當まれたものである。出土品の中には、須恵器高杯、蓋杯、疊の他に、滑石製模造品の臼玉や碧玉製管玉の未製品、赤



1. 山崎古墳
2. 柴古墳群（方墳2、前方後方形古墳推定地1）
3. 馬込山古墳群（円墳2、方墳6）
4. 馬込山古墓群（室町時代火葬墓）
5. 金崎古墳群（国史跡）
6. タテチョウ跡（繩文～歴史、遺物包含地）
7. 堤越跡（古墳時代集落）
8. 柴遺跡（古墳時代集落）
9. 西川津遺跡（繩文～歴史、遺物包含地）

第1図 周辺の主要遺跡

色顔料塗彩の土師器壺があり、祭祀的性格の強い住居跡として注意される。

北方およそ 800 m の地点には朝駒川が北から南へ流下しているが、この河川敷を中心に「タテヨウ遺跡」があり数多くの縄文～弥生、古墳、歴史の各時代の土器片、木製品など多種多様のものが出土している。^④

しかし、縄文、弥生時代の集落跡は、現在のところ発見されていない。

III 調査の概要

(1) 墳丘の構造 昭和51年の分布調査の時点では、一辺15m、高さ 2 m ほどの中規模程度の方墳と思われた。

測量したところ、一辺15m、高さ約 1.75 m の比較的大きな方墳で、上面は 6.5 m × 8.0 m ほどの広大な平坦面を有し、墳裾の周りを削って平坦面を形成していることも分かった。

調査の結果、墳丘基盤は、一辺19m、高さは約 2.0 m ほどでその上に中心部で55cm、斜面で26cmの盛土を施している。

墳裾は、平均幅 2 ~ 4.5 m ほどの平坦面を形成し、その外は自然斜面となっている。

墳丘中心部の盛土の中途には、直径20cm～40cm、深さ 3 ~ 10cm ほどの柱穴と思われるビットが計 4 個確認された。また、西側墳裾には来待石製の墓石のような加工石片が 1 個、表土中にあった。

これらは、近世以後、墳丘を利用して何らかの供養塔が設けられたためではないかと思われる。

(2) 主体部 主体部は、墳丘基盤を成す黄褐色～明褐色粘性土を略長方形に掘り込んだ堀り方に木棺を据えたものである。

まず、堀り方は南北長 3.35 m、東西幅 2.0 m、深さ 15cm を測る。東北角から細長く排水溝が約 4 m 墳裾の東北方へ続き、その先端は自然消滅している。

排水溝の横幅は、平均 20cm、深さは垂直に 27cm あり、下半部には差し渡し 5 cm ~ 15cm ほどの角礫が多数 2 ~ 3 重になって積み重ねられていた。

内部の堆積土は、底部で暗褐色の粘性土で、当初から固く埋め込まれていたことが知られている。

木棺は遺存していなかったが、墓室内の底部に計 6 個の転石が、北部、中央部、南部の左右両側に 1 個ずつ対称的に配置されており、差し渡し 15cm ~ 25cm ほどの比較的大きな安定した平面を持つ石であることと、その平面が左右両側から中心に向かって傾いているこ



第2図 墳丘測量図

などの理由から、木棺、とりわけ底の丸い割竹形木棺の設けられていたことが推定される。

これによって推定される木棺の大きさは、長さ 2.4m、幅 60cm、深さ 60cm ほどである。

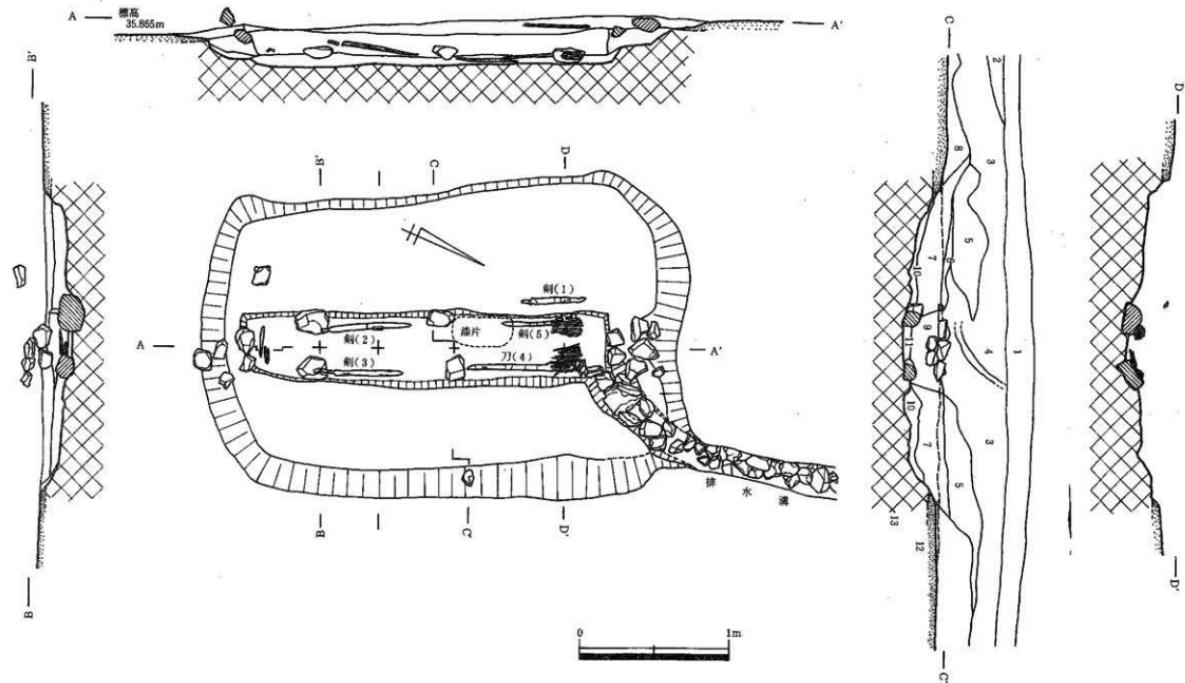
堀り方と木棺を区別する土層の差異は、殆んど区別出来ない。

これらの台石の上に割竹形木棺が安置されていたことが推定される。

副葬品は、大半がこの台石の部分から内側に認められた。

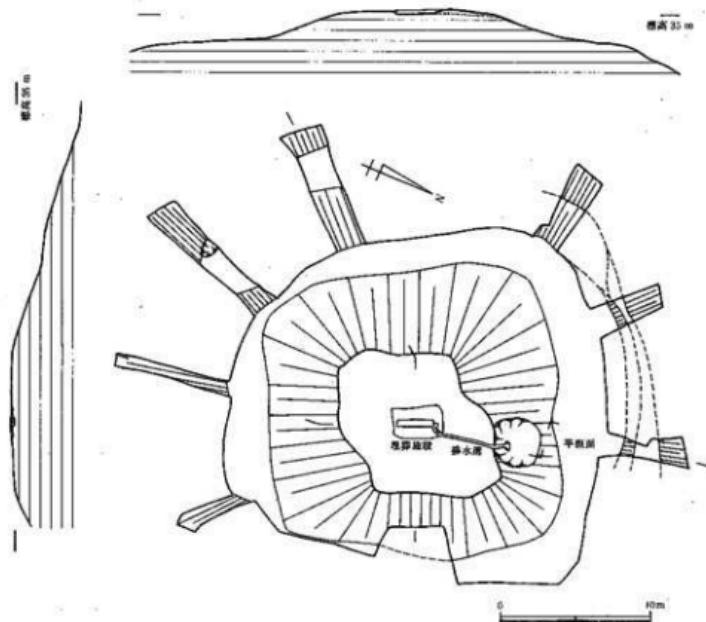
すなわち墓横の北端部の東側には、12本以上の鐵鎌がひとかたまりあり、一部は中央部にくずれ落ちた状態で検出された。

刃先は棺の外側、つまり北側方向に全て向いていた。台石の上に直接のった状態であつ



第3図 山崎古墳埋葬施設実測図

1. 表土（褐色土）
2. 褐色土
3. ブロック混りの褐色土
4. ブロック混りの暗～黒褐色土
5. 黒褐色ブロック混り土
6. ブロック混り黒褐色土
7. 小ブロック混り明褐色土
8. 大ブロック混りの明褐色土
9. 細かいブロックを混り軟質暗赤褐色土
10. 黒～明褐色ブロックを含む砂質土
11. 炭化物を含む暗褐色粘性土
12. 旧表土（黒色土）
13. 地山明褐色粘性土



第4図 調査後填丘測量図

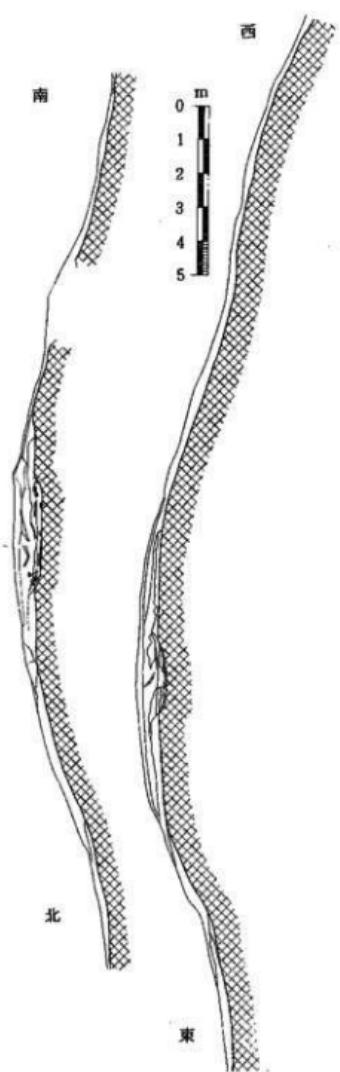
た。この鉄鎌の上には、直刀が1口横たわっていた。長さ73cmほどで、刃先は中央東の支石の近くにまで到達している。

墓横の北部の西側には、同じく台石の上に乗った状態で、鉄鎌がひとかたまり検出された。その数は、35本以上である。

この台石の南側には、棺の側面方向に平行した形で鉄剣が1口発見された。刃先は南方つまり中央の台石の方へ向いていた。長さ35cmと短剣の部類に属するものである。

南部の東側には鉄剣が1口あり、刃先を北に向けていた。長さ58.4cmの長剣である。茎のほうは台石の上に落ちて折れていた。

南部の西側には、同じく鉄剣が1口あり、刃先を北に向けていた。長さ58.5cmの長剣である。茎は、やはり台石の上に落ちていた。この鉄剣の身の中央部に、身の下方へもぐり込むように長さ20.9cmの箋が一本あった。



墓壇の南端、木口部には棺の中軸線の方向とは直角に鉈1と鐵鎌2本が検出された。

鉈は、刃先を西方向に向けていた。鐵鎌は、完形品ではない。

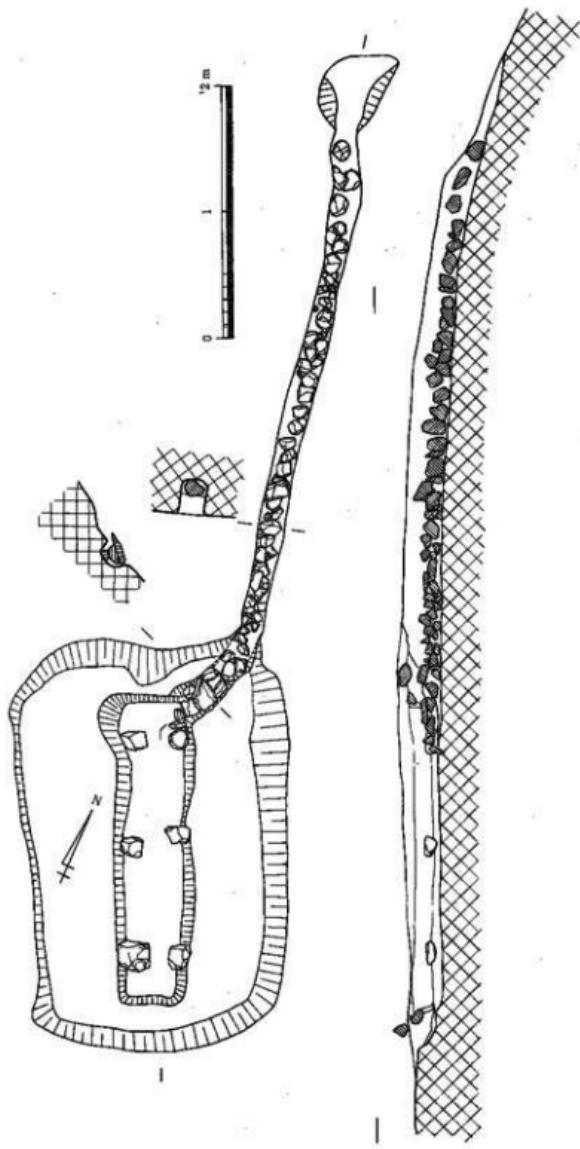
墓壇北側の外側にも鐵劍が1口発見された。明らかに棺外遺物である。盛土上面から60cm下方の深さにあり、それは掘り方の上面レベルとはほぼ一致している。

このことから、この鐵劍は棺を安置し、掘り方の周囲に土が埋められた時点で執り行われた葬送儀礼に係るものではないかと考えられる。

(3) 排水施設 排水施設は、墓壇の北東角から掘り込まれ、掘り方の北東角を通過して北へ曲がって墳丘北側斜面の下部へ傾斜し、長さ約4mほどで消滅しているがその先端部分はさわたりし60cmほどの浅い凹地を形成しており、その部分で自然に埴堀に流下するようになっている。排水溝は上幅20cm、深さ平均28cmを計り、下半部に直径10~15cm前後の角礫、転石を入れるものである。

第5図 墳丘断面図

第6圖 埋漬設施、排水設施測圖



(4) 出土遺物 1は、長剣で全長58.5 cm、身の長さ45.2 cm、アの断面では幅2.8 cm、厚み6 mm、イの断面では幅2.9 cm、厚み6 mm、ウの断面では幅3.4 cm、厚み6 mmを計る。茎は長さ13.3 cm、エの断面は厚み3 mm、幅1.75 cmを計る。目釘穴が2か所認められる。間に近い方の穴は直径6 mm、茎尻に寄った方の穴は直径4 mmを計る。

身には木鞘の一部と思われる木質部が、茎には木柄と思われる木質部が遺存していた。

2は、やはり長剣で全長58.4 cmと1とはほぼ同じ大きさである。身は長さ47.2 cm、アの断面で幅2.9 cm、厚み6.5 mm、イは幅3.5 cm、厚み8 mmを計る。茎は長さ11.2 cm、ウの厚み6 mm、幅1.8 cm、茎尻に寄った方に直径4 mmの目釘穴を1か所所有する。

関部に近い方には長さ2.7 cmにわたって、木柄とは異質の木質部が認められる。

身、茎共に鞘及び柄と思われる木質部が遺存している。

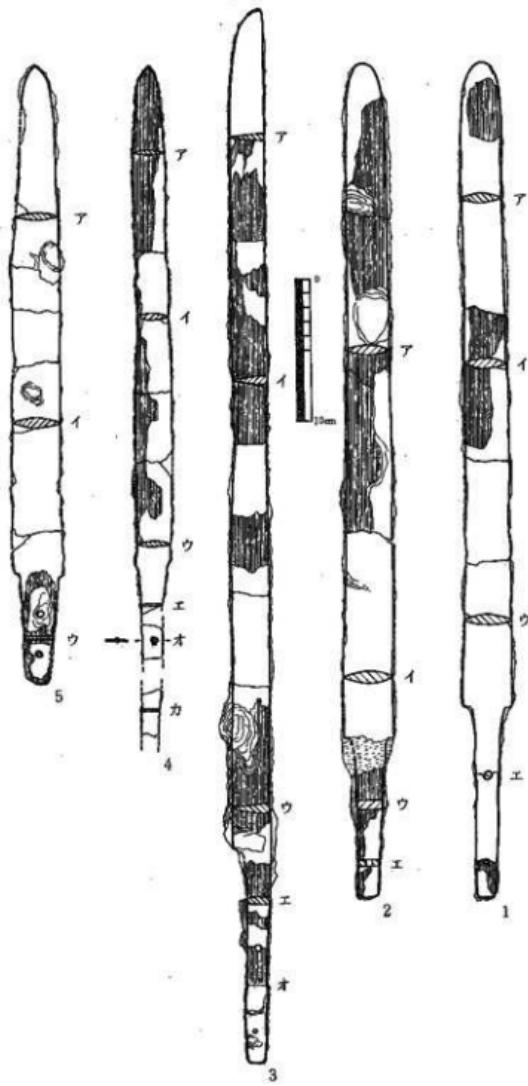
3は、直刀で全長73.55 cmの細身の長刀である。刀身は長さ58.85 cmを計り、断面はアで幅2.4 cm、厚み5.5 mm、イで幅2.4 cm、厚み6 mm、ウで幅2.8 cm、厚み6.5 mmを計る。各所に木鞘と思われる木質部を遺存する。

茎は、長さ14.7 cmを計り、断面はエで幅1.8 cm、厚み4~5 mm、オの位置で幅1.4 cm、厚みは両端で2 mm、中央部でふくらみ4 mmを計る。目釘穴は2か所あり間に近い側のものは直径5×4.5 mm、茎尻に近い方のものは、直経3 mmを計る。木柄と思われる木質部を遺存する。

4は、鉄劍で茎の一部が接合しないので全長は不明であるが、身の長さ34.6~35.1 cm、断面はアで幅2.2 cm、厚み3 mm、イで幅2.2 cm、厚み4 mm、ウで幅2.3 cm、厚み3 mmを計る身の厚みは、他のものに比べて薄く、幅も狭いことが注意される。全体に木鞘と思われる木質部が遺存している。茎は身から連続する部分が長さ3 cm前後遺存し、さらに同一個体のものと思われる小片が2片あるものの、接合しないので茎の原寸法は不明である。断面はエで幅1.6 cm、厚みは両端で1 mm、中央部で2 mm、オで幅1.5 cm、厚み1.5 mmを計り、中央部に直径5 mmほどの目釘穴が認められる。カでは幅1.3 cm、厚み1.5 mmを計り、一方の側がやや狭くなる。

5は、棺外出土品で全長43.3 cmを計り、身は長さ35.5 cm、断面はアで幅3.0 cm、厚み5 mm、イで幅3.4 cm、厚み6 mmを計る。木質部の全く遺存していないことが注意される。茎は長さ7.8 cm、断面はウで幅2.1 cm、厚み2.5 mmを計る。木柄と思われる木質部を遺存する。目釘穴は1か所認められ、さらに1か所が推定される。共に直径4.5 mmの円孔である。

鎗 2本ある。内1本は墓拝の南端部から出土。長さ20.9 cm、刃長5.2 cm関部の幅1.5



第7図 出土遺物実測図(1)

mm、厚み 3 mm を計り、刃先に向けて 23° の角度をもってカーブする。刃の断面は、上部の中間に稜線がつき、山形に出っ張り、裏側はその分だけ凹んでいる。

茎は、長 15.7 cm、幅 1.1 cm、厚み 3.5 mm、茎尻の方で 2 mm を計る(第 7 図 3)。この鉢と共に出土した鉄鎌は、いずれも刃先を欠失するが断面 4 × 6 mm の方形を呈する。長頭鎌に該当する(第 7 図 1、2)。

他方の鉢は、No. 1 の長劍の刃部の下に中半もぐり込むような形で出土したのもで、現存長 6.9 cm、刃部 2.5 cm、同厚み 1.5 mm、茎長 4.4 cm、厚み 2 mm、木質部を遺存する。刃部の外回りには、茶色の漆状の膜が附着している(第 7 図 4)。

鉄鎌 墓壙の北部両側にあった鉄鎌のかたまりは、いずれも長頭鎌の部類に属し、刃先の形状から両刃のものと片刃のものの 2 種に分類される(第 7 図 15~18)。

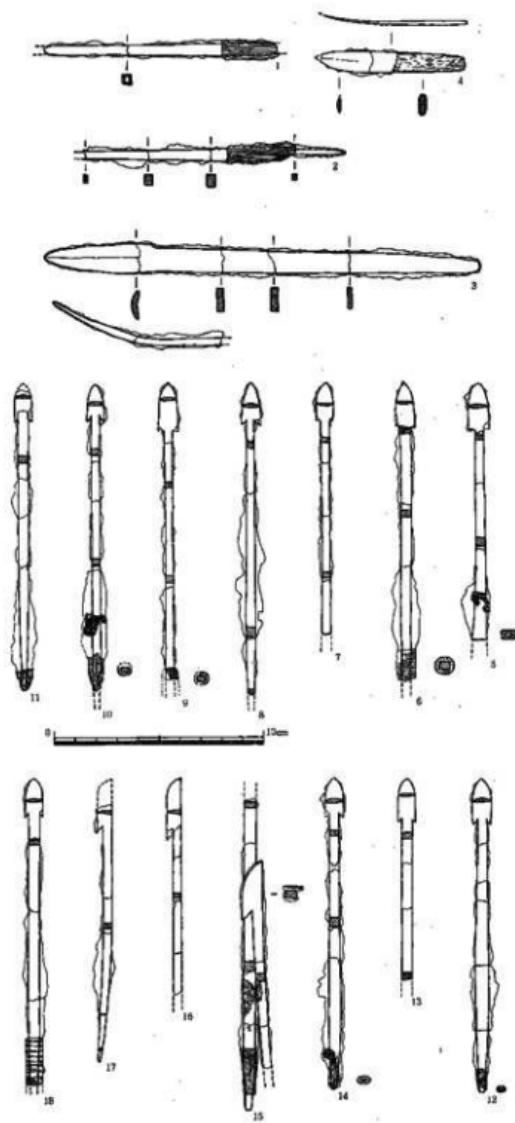
両刃のものは、12 を例にしてみると全長 15.1 cm、刃長 2.0 cm、茎長 13.1 cm、刃部の厚み 1.5 mm、逆刺の長さ 2 mm 前後、茎の厚みは 5 × 6 mm 前後である。他例では、末端部には表面を桜皮で巻いた箇の一部が認められる(第 7 図 12)。また、5、10、14 には布痕が認められる。

片刃のものは、15 を例にすると刃長 2.4 cm、厚み 1 mm 強、逆刺長 4 mm、17 では茎長 11.4 cm、厚み 3 × 4 mm を測る。

このような長頭鎌は、県内では松江市竹矢町才ノ崎 1 号墳、同市馬潟町観音寺 2 号墳、安来市黒井田町毘売塚古墳、同市西赤江町仲仙寺 2 号墳、八束郡玉湯町築山古墳から出土⁽⁵⁾している。

こうした長頭鎌は、5 世紀半ばに甲冑の変遷に対応して新たに出現していくことが指摘されている。

したがって本古墳の築造時期は、さほど新しい要素も無いので、ほぼ 5 世紀後半頃としてよいのではないだろうか。



第8図 出土遺物実測図(2)

IV 小 結

本古墳を特徴づけるものは、(1)特異な埋葬施設と排水施設、(2)鉄製攻撃用武器類のみで占められた副葬品であろう。

以下、これらのもつ二、三の問題点について検討してみよう。

(1) 埋葬施設について 埋葬施設は、黒色土を旧表土層とする地山面を南北3.35m、東西2.0mの略長方形の範囲について深さ15cmほど、やや浅く掘り込んだ後、中央部に南北長2.4m、東西幅0.6m、深さ6~8cmの墓壙をさらに掘り込み、北部、中央部、南部の左右両側に、さしわたり30~40cmのやや角ばった石を対称的に配置し、そこに底部の丸い木棺（恐らくは割竹形木棺）をすえ置き覆土したものである。^⑥

出雲東部の代表的な中期古墳の多くが、割竹形石棺、舟形石棺、長持形石棺などの石棺を採用しているのに対して、本古墳では前期古墳に通有の割竹形木棺を採用していることが注意される。^⑦木棺の下部に支えとしての石を対称的に配置する方法は、造山第3号墳などと同様である。

ところで、棺直下の底面、つまり支石と支石の間の底面は、当初、副葬品の出土レベルで止めていたが、それでは両側の台石が地山に食い込んだ状態となってしまう。

そこで、墓・中央部の台石部分に東西方向の小トレンチを入れて観察した。その結果厚み3~5cmほど、やや灰褐色の粘性土が堆積していることが明らかとなった。しかし、この下層の灰色粘土とは、質的に殆んど差がなく、色調で区別出来る程度である。この灰色粘土層の上面を底面とする積極的な根拠を持ち合わせないが、一応図面では、そのように表現しておく。それにしても、やや地山面に石が食い込むようであるので、たたき込んで安定させたようである。

この木棺の木口の壁については、木板でとじてあったのではないだろうか。というのは墓壙の南と北にそれぞれ5~7個のさしわたり20cm前後の石が群集しており、これが、その木板の固定用に使われたものと思われる。造山第3号墳では、粘土塊が認められるので、木板を粘土で封じたようである。^⑧

(2) 排水施設について 同様の排水溝は、畿内や山陽地方の前期古墳に散見されるという。県内でも、安来市荒島町所在の造山第1号墳第1石室、造山第3号墳、大成古墳、寺床1号墳に見られる。

しかし、前三者は、4枚の板石を断面長方形に組み合せて作った暗渠だったり、地山を掘り込んで小形の扁平な割石を断面V字状に並べ、内部に小礫を詰めたものである。

県内で本古墳と同種のものは、むしろ八束郡東出雲町揖屋所在の寺床1号墳の例に見られる。寺床例は、長さ8.6m、上端幅85cm、下端幅37cm、墳頂部からの深さ1.5m余りを計る。溝底には拳大の円蹠を數き詰めるものである。

⑩

畿内や山陽地方の前期古墳によく見られる排水溝は、この種のものであり、こうした施工技術が何らかの契機により畿内から山陰地方へもたらされ、寺床1号墳に採用されたものと思われるが、規模が縮少されたとはいえ、時代を下って5世紀後半の古墳に採用されたことは、その工法を末だ記憶していた人がいたことをほのめかしている。一方では、被葬者集団の中に採用者がいたことが考えられる。いずれにしても現段階では、比較資料が少ないと、寺床1号墳を築造した集団と何らかの関係があろう。

(3) 副葬品について 鉄劍4口、鉄刀1口、鏡1、鐵鏡47本以上と、鐵器のみを副葬し、鏡、玉類、土器類など通常見受けられる遺物は皆無であった。県内における、中期古墳の副葬品を見ると鐵器以外にも多種多様の遺物があるが、鐵器に限ってみると、やはり刀、劍、鎗という攻撃用武器が主体であり、それに次いで短甲など防ぎよ用の武器も散見される。

このことは、広く日本列島全域の古墳時代中期文化にも顕著に表われている傾向である。つまり、畿内の古墳についていえば、大阪府藤井寺野中アリ山古墳、堺市七觀古墳、堺市百舌鳥大塚山古墳、大阪市美原町黒姫山古墳、奈良市ウワナベ6号墳などにみられるように、鐵器の大量埋納が行なわれている。このことは、「……古墳の被葬者を含む単位集団が、大量の鐵製品を蓄積していたこと。もう一つは、それらの鐵器を製作する機構が大規模で、しかもある地域で集中的に組織化されていた」と指摘されている。

⑪

畿内から隔離した出雲地方においてはどうであったのであろうか。畿内のように鐵器のみを埋納するということは無いとしても、鐵器の総量は相当なものである。

その鐵器が俗に中國山地もしくは奥出雲地方で、たたら製鐵によって生産されていたとする確証は何も与えられていない。今日、古墳時代中期においては、政治的、經濟的に圧倒的に優位に立っていた畿内勢力が、地方勢力を支配強化する過程において、こうした鐵製武器類を地方の豪族に与えたのではないだろうか。

現実に被闇が行なわれたこともあるだろうかと思われるが、平時においては、こうした鐵製武器類を大量に特定の豪族が保有していることが、それだけでその地域の平和的な社会の維持安定につながっていたことも否定出来ないであろう。

もっと想像をたくましくすれば、恐らく埋葬に際して亡き人の副葬品として大量の鐵製品（それでも、被葬者集団の保持している鐵製武器類のはんの一部であろう。）を埋納する

おごそかな儀礼を一般民衆に見せつけることによって支配関係を維持することが出来たのではないかと思われる。

ところで、こうした中期型の古墳は、川津地方においては調査例が少ないので、まだ不明の点が多いが、本古墳と同規模程度の古墳は、とりわけ低丘陵の突端部に点在していることが注意される。

その中で、西川津町所在の金崎古墳群は、前方後方墳2基と方墳9基から成り、出土品から5世紀後半～6世紀前半頃にかけて連続継起的に築造された川津地区最大の豪族の奥都域であったと思われるが、その中でもとりわけ第1号は、全長32mの前方後方墳で後方部中央に長さ3.8m、幅1.35m、深さ1.0mの竪穴式石室を設けるものであるが、昭和22年の京都大学の梅原末治博士と地元の山本清氏らの調査、及び昭和51年の松江市教育委員会の調査によって優美な古式須恵器類、鏡、大量の玉類と共に鉄製品として漆塗鞘付直刀¹²1口、鉄鉢1口、鐵劍1口、鐵刀子1口、U字形鎌先1が副葬されていたことが分かった。

須恵器の年代観から5世紀後半頃の築造と考えられているから、本古墳とはほぼ同時期である。

とすれば、朝酌川をはさんで北部に金崎1号墳を造り得た豪族が、南部には本古墳を一例とする豪族が、それぞれ連立、播居していたことになるが、果たしてこれらが対立関係にあったのか、連合部族的な性格であったのかは、今少し周辺の古墳の調査例の増加を待ってから検討されるべきであろう。

いずれにしても、本古墳は、5世紀後半頃の朝酌川南部の有力豪族の墓であり、その豪族は、鉄製武器類を大量に入手し、保有することによってこの地域を掌握し政治的、経済的基盤を確立していったことが考えられる。

注1 石橋逸郎・近藤正「松江・馬込山古墓群」（島根県教育委員会編『島根県埋蔵文化財調査書 第Ⅲ集』昭和46年3月所収）

注2 松江市教育委員会「松江市の埋蔵文化財——遺跡分布調査報告書」1980

注3 島根県文化財愛護協会「主要地方道松江一境線バイパス関係 埋蔵文化財調査報告Ⅰ」
1976.3

注4 島根県教育委員会「朝酌川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書—1—」
昭和54年3月

注5 島根県教育委員会「国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書—1—」
昭和51年3月

注6 山本清「山陰の石棺について」（山本清「山陰古墳文化の研究」昭和46年7月所収）

注7 島根県教育委員会「造山第三号墳調査報告」昭和42年3月

注8 2に同じ

- 注 9. 渡辺貞幸「寺床 1 号墳の諸問題」（松江考古学談話会「松江考古第 5 号」1983年 4 月所収）
- 注 10. 4 に同じ
- 注 11. 森浩一、炭田知子「考古学から見た鉄」（森浩一編「日本古代文化の研究 鉄」昭和49年 10月社会思想者所収）
- 注 12. 松江市教育委員会「史跡金崎古墳群 昭和52年度環境整備事業報告書」昭和53年 3 月



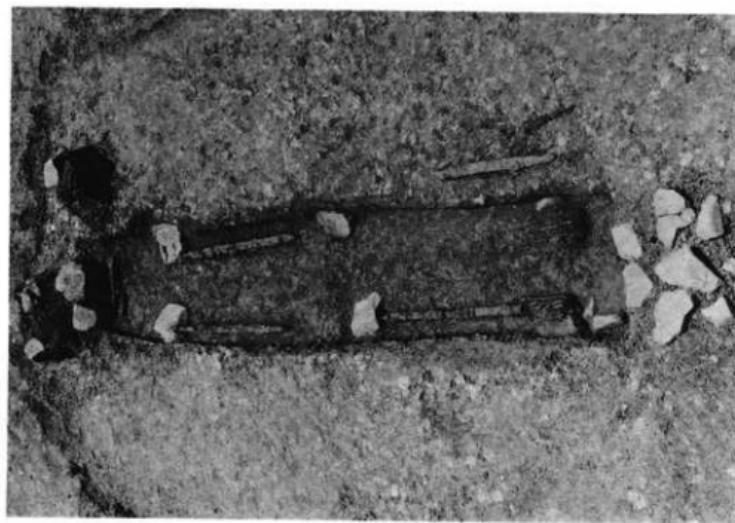
山崎古墳（調査前）近景 西をみる



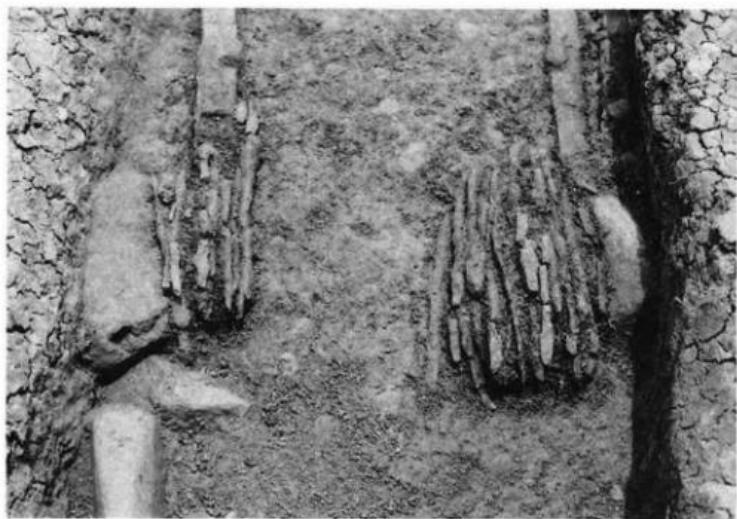
墳丘盛土と埋葬施設の関係



主体部堀り方と石群、棺外鉄劍出土状況



副葬品出土状態（北からみる）



墓壇内 北部鉄錠族 出土状態（北からみる）



墓壇内 北部副葬品出土状態



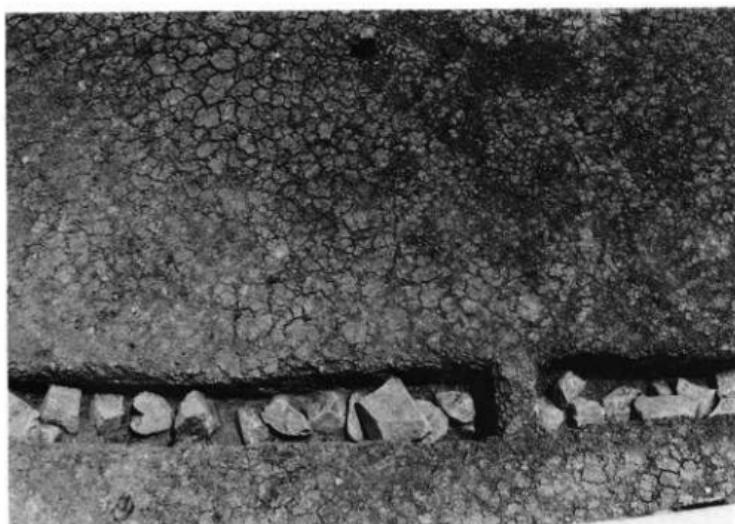
墓 塚 断 面 (北をみる)



墓 塚 と 堀 り 方 全 景 (東からみる)



墓壙と排水施設の関係



排水施設



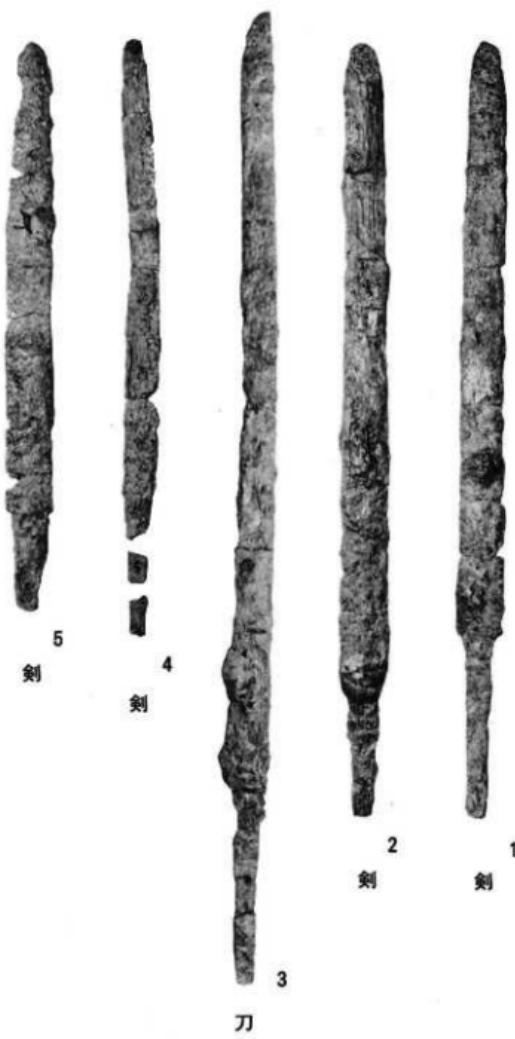
排水施設全景（東からみる）

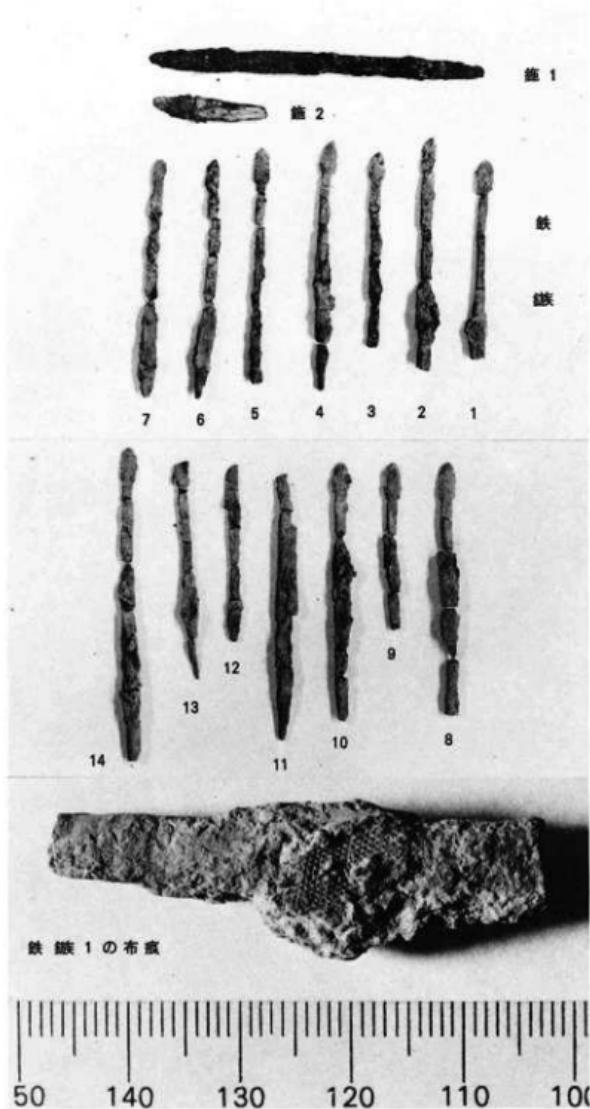


排水施設全景（石除去後）



排水施設全景（北からみる）





山崎古墳

昭和59年3月発行

発行 松江市教育委員会

印刷 千鳥印刷有限会社

松江市春日町344-9

013